

簡研究の現状に対する問題提起となるだろう。

あえて課題を一つだけあげれば、本書が検討対象とした木簡のほとんどが新羅木簡であり、今後は百済木簡や中世高麗木簡など、他の地域や時代の木簡群についての検討も待たれるところである。著者にはぜひ、韓国出土木簡に関する第二、第三の専論をまとめてもらいたい。

(三上喜孝・国立歴史民俗博物館准教授)

柿沼陽平著

『中国古代の貨幣』

お金をめぐる人びとと暮らし』

吉川弘文館 二〇一五年二月刊

四六判 二一八頁 一、八五六円

二〇一一年に『中国古代貨幣經濟史研究』（汲古書院刊）をまとめられた気鋭の若手研究者・柿沼陽平氏が、このたび吉川弘文館の歴史文化ライブラリーの一冊として、高校生以上的一般読者向けに本書を上梓された。第一章「貨幣と国家」で制度史、第二章「競合する貨幣たち」で經濟史、第三章「人びとをつなぐ貨幣」で社会史と、異なる視点から重層的・構造的に中国古代における貨幣と交換の世界を分析する本書は、なかなかの力作、いや秀逸なる出来栄えと言つてよい。順を追つて内容を見てみよう。

導入の「中国古代貨幣の世界へ―プロローグ―」では、まず貨幣史を研究する現代的意義が、人間がいつから「お金」に人生を左右される生活に足を踏み入れたのかを解明することであり、さらに本書では中国古代の「お金」をめぐる人々の生活の面白さをはじめ、日本と中国の貨幣の違いやそれぞれ

の特殊性を知って欲しいと述べる。

第一章では、強い通貨性を持った貨幣が流通し、貨幣経済が成立したことを示すメルクマールが、文献上での「買」字・「売」字の登場にあるとする観点から、中国古代貨幣の発生時期を、「買」字の用例が文献上で急増する戦国時代以降「売」字の登場は統一秦以降とする。続いて、代表的な青銅貨幣・秦の半両銭が「半両」という銭文の存在をその証とする名目貨幣で、実際に半両（＝十二銖）の重量がないものも流通したとし、戦国秦が前三三〇年前後に半両銭を国家公認銭（「行銭」として領域外への持ち出し「通銭」）を厳禁したのは、青銅原料の輸入に依存せずに貨幣を鑄造することと経済的自立を図ったためと説明する。しかし、半両銭体制の完成前に統一秦が滅亡すると、前漢は銭の民間鑄造の承認と禁止を繰り返し、民間では軽重様々な半両銭が出回り、実質重量で取引された。そのため、武帝は元狩年間（前一二二年～前一一七年）に銭文と実質重量が一致する五銖銭を制定して、半両銭体制は終焉を迎えたとする。

第二章では、当時の市場の様相について、物価は固定されず、競りによる価格で取引され、買手は詐欺に遭うこともあったが、市制・顧客関係・列肆・値札が機能して商品情報を手できたため、市場では比較的公正で激烈な価格競争が行われたとする。また、郡や県の治所に設置された郡市や県市は、官吏の監視下に置かれ、高価な奢侈品や遠隔地交易品

が取引されたが、官吏の監視もない夜市などでは、店舗を持たない坐賈が日用品を販売したことから、中国古代の市場には幅広い階層性が存在し、これと連動して前者では黄金や布帛など高額貨幣が、後者では穀物や銭など小額貨幣がそれぞれ多用され、貨幣にも階層性が存在したと結論づける。

第三章では、当時の郷里社会（村落共同体）に目を向け、年間数十万銭を稼ぐ豪族や大商人が居る一方で、災害ですぐに「溺死」する多数の農民が存在し、貧富の差は深刻な社会問題だったとする。しかし、郷里社会の秩序がすべて貨幣の多寡で決定したのではなく、場に応じて異なるコミュニケーション原理が存在し、公的な場では爵制が、遊民層では德行を重視する任侠的秩序が、市場では価格（財力）が、家族内では血縁的秩序がそれぞれ機能したとし（筆者はこれを「四肢の世界観」と命名する）、このような状況下、諸貨幣が市場での支払いだけではなく、制度的・慣習的な賜与・贈与・返報・賄賂など様々な用途に使われた実態を説明する。

以上、戦国秦漢時代の銭・黄金・布帛が、経済的流通手段として共通の機能を有すると同時に、様々な場で独自の機能を持っていたことを明らかにした筆者は、「中国古代貨幣の特殊性―エピソード―」で、中国古代貨幣の世界は統一的・単一的・合理的・経済学的とは表現しがたい多様性を持っていたとし、この多様性こそ「四〇〇年間続いた漢帝国の強靱性」の要因であったのではないかという仮説を提示して、筆を置

いている。

このような本書の特色は、何と言っても戦国秦漢時代の「お金をめぐる人びと」の国家との関わりや、市場や郷里社会での生き様を、わかりやすく活写している点である。これは、制度的記述に片寄りがちなこの分野を、多面的に分析しながら、著者自身による最新の出土文書資料研究の成果をふんだんに盛り込むという手法が奏功しているためである。

だがそれはばかりでなく、ある場面では高校生が使う世界史用語集の「半両銭」の項目を批判的に検証し、ある場面では秦漢帝国の郷里社会から市場に買い物に行く設定で論を進めるという筆致によるところも大きい。また、随所にハイエク、ポランニーやマルクスら経済学・人類学の偉大な先学の業績が援用・紹介されているのも刺激的であるし、中国古代では円銭の孔に紐を通して運んだため、ギリシア・ローマのように財布が使われなかったとか、中国古代でも愛情や性の表現として接吻の習慣があつたなどの比較社会史的なエピソードも読者を飽きさせない。これらは、日頃から学際的研究を心がけ、国際的学会にも積極的に参加している著者の研究成果の一端とすることができるが、学問にどのように取り組むべきかを初学者が考える一助にもなるう。このような面も含めて、極めて充実した内容の本書は、中国古代の「お金をめぐる人びとと暮らし」に興味を持ったすべての方々を読んで頂きたい一冊である。

(野中 敬・東京都立戸山高等学校主任教諭、
本学教育・総合科学芸術院非常勤講師)